

Y O K A C A R E O M U T A



We are now in the 21st century and heading towards a super-aging society.
However, it is difficult to say that an excellent nursing care system has been established.
There are many problems such as wages and work-life balance because various nursing care workers are involved.
Nonetheless, nursing care workers find joy and pleasure in their work because they take care of people.
The work that supports people gives us precious awareness, learning, and the power to move on to the future.
We interview a wide variety of nursing care workers
who are active in their field and approach their thoughts and reality there.

12の生きる介護

THE FUTURE OF CARE IS THE FUTURE OF US.





通所介護	黒田 好恵 の場合	3
訪問リハビリテーション	柿原 健吾 の場合	4
小規模多機能居宅介護	斎藤 寛子 の場合	5
居宅介護支援	重 隆志 の場合	6
福祉用具貸与	古賀 正悟 の場合	7
訪問看護	後藤 かずさ の場合	8
通所リハビリテーション	平岡 奏恵 の場合	9
有料老人ホーム	立山 一明 の場合	10
訪問介護・ヘルパー	坂井 典世 の場合	11
通所介護	古戎 伸次 の場合	12
短期入所生活介護	仙崎 美咲 の場合	13
有料老人ホーム	西村 理絵 の場合	14

12の生きる介護

CONTENTS



21世紀の今、私たちは超高齢化社会へと歩みを進める。しかし介護の現場は、十分整っているとは言い難い。さまざまな人が対象であるがゆえの問題、賃金、ワークライフバランス…。課題は山ほどある。

それでも、介護の現場には人が相手であるからこそその喜びや魅力がある。人そのものを支える仕事は、私たちにかげがえのない気づきや学び、未来へ進む力を与えてくれる。

ここでは、介護の現場で活躍する多様な人々取材し、そこにある彼らの思い、そしてその実際に迫る。

見えてくる それぞれの人生 私の生き方

「仕事復帰するならまた病院で働きたいと思ってんですけど、病院は残業が多いというイメージが家族にあって。じゃあ、介護施設がいいかなと」。下関市の病院で看護師として働いていた黒田好恵さんは、結婚を機に大牟田市へ移住。子育てしながらの再就職先に、デイサービス施設を選んだ。

「医療の現場では患者さんの傷や病気を見るわけですが、介護はその人全体を見ている感じ。ここで働き始めた当初は、まだ医療の視点で見ているところがあって、例えば傷の手当ても“こんな(軽い)手当てでいいのかな”と気になることもありましたが、でも、ここは“治療”が目的じゃなく、手当てはあくまでケアの一部。だからこれでいいのだと、次第にそう思えるようになりました」。

子どものころから人体の仕組みや機能に興味があり、それが看護師の道を選んだ理由の一つだった。介護の現場でも“人”への関心は尽きない。「介助をしていると、その方のこれまでの生き方を、体が物語っていると感ずることがあります。この方はこういう仕事をしてきたからここにタコがあるんだとか、この方の体形はこうした暮らしが長かったからかな、とか。そんなことから、相手をより深く理解することができる。年を取るということを、自分ごととして考えさせられます。それが、自分のためにもなっていますね」。

デイサービスは日帰りで利用する介護施設。スタッフは入浴や食事、機能訓練のサポートのほか、自宅から施設まで利用者の送迎もする。黒田さんは送迎の業務が大好きだという。「ご本人だけでなく、そのご家族との交流が増えるのも、看護師時代とは全く違うところ。送迎もその機会の一つなんです。短い時間の中にも、本人と家族の関係性や生活環境、家族の歴史の断片を知ることができて、本当にさまざまな家族のかたちがあるんだと思います。家族を知ることが、よりきめこまやかなケアにつながることもある。「洗濯物の分け方をその家庭のやり方に合わせるとか、普段から会話が少なそうな親子だったら、送迎でお会いするときに『今日はこんなこと言っていましたよ』と施設での様子をお伝えするとか、ちょっとしたことなんですけど、多分スタッフみんなが自然とやっていることだと思います」。

ここ数年はコロナ禍の影響下であわただしい日々が続いた。「仕事も家事もいっぱいいっぱいになると“とりあえず映画行か!”ってなるときが」。黒田さんにとって映画鑑賞は“心の浄化”。「集中して観たいから、朝に1人で行くのがいいんです。

観終わるとなんだかすっきりして、よし、がんばろう!って思えます」。まずは自分が楽しむこと。友人や仕事仲間ともよくそんな話になるという。「心に余裕がないと効率ばかり考えて、目の前にいる人が見えなく

なってしまう。相手の気持ちを受け止めるには、自分の心を柔らかくしていないと。この仕事をしているとなおさら、人生を楽しまなきゃって思うんです」。



通所介護

黒田 好恵 (40歳)

医療法人福寿会 デイサービスセンターみやべ所属
看護師

山口県下関市出身。高校専攻科卒業後、看護師として下関市の病院に勤務。
2007年結婚を機に大牟田へ移住。2009年現在の職場へ介護スタッフとして就職。

作業療法士として8年目を迎えた柿原健吾さん。リハビリ主任として通所リハビリの業務と訪問リハビリを兼務し、忙しい毎日を送る。高校生のときに作業療法士を志し、大学はリハビリテーション学部 作業療法学科を専攻した。それでも、初めての現場は一。

「目の前にいる人のために、まず何をしたらいいのかわからなかった」。リハビリにおいて目標の設定は最も重要なことの一つだ。リハビリに臨む人たちが望むゴールは、当然一人一人違う。歩けるようになりたい人もいれば、家事動作ができるようになりたい人もいる。具体的にイメージできない人、言葉にしない人や、リハビリに消極的な人もいた。

この人が望むことは何だろう。それを達成するために、どう導けばいいんだろう。自分がやるべきことは。本当にこれでいいのかと不安を抱えながら向き合い続けた。先輩のアドバイスを参考に、とにかくやってみる。できるだけ相手に話しかけ、思いの糸口を探った。「どうしたら笑顔になってくれるかな、と考えながら。もともと人と話すのが好きだし、人に頼られるとうれしい。それがモチベーションになってたりもします。あの頃よりはうまくなったと思いますよ、多分(笑)」。

昨年から訪問リハビリにも携わるようになって、リハビリに対する考え方に変化があった。「何か運動をして筋力や体力をつけることだけがリハビリじゃないと、より強く思うようになりました。単に“立てるようになる”だけでなく、それをその人の暮らしや本当にやりたいことにどう生かすかが大事」。忘れられないことがある。訪問で初めて担当した女性。「本人や家族と話していて、近年は花見にも行っていないと聞いて、それならと“花見に行く”をゴールにしました。花見に行くために、立つ練習や手指の運動をがんばられて、

今年の春に実現することができました」。甘木山の満開の桜の下で女性は杖をついて立ち、家族と一緒にピースして写真を撮った。その光景が今も胸に浮かぶ。「その方から、たくさんのことを学ばせていただいたと思っています」。

利用者のそれまでの生活や習慣に寄り添ったリハビリの「ゴール」設定を心掛ける。利用者本人だけでなく、その家族との対話にも気を配るようになり、自分自身の視野も広がった。

「ついこの前は、利用者の家族が『一緒にスーパーへ買い物に出かけても、入り口でシルバーカーに座ったまま待っていて動こうとしない』と残念がられていて。スーパーの中って結構広いでしょう。日中はほとんど寝ている方だったので、店内を動き回れるくらいの体力がつけばと思って、リハビリを地道に積み重ね、歩行器をレンタルしたんです。そしたらある日ご家族から『先日、歩行器でスーパーの中を一緒に歩くことができました』と報告があって、もう心の中でガッツポーズ。これこれって(笑)」。人との出会いから生まれる経験と成果は、確実にやりがいにつながっている。

柿原健吾 (32歳)

訪問リハビリテーション

医療法人静光園 白川病院
訪問看護ステーション／通所リハビリテーション まごころ所属
作業療法士
大牟田市出身。大学でリハビリテーション学部を専攻し、卒業後に作業療法士として2014年に現在の職場に就職。通所リハビリと訪問リハビリを兼務している。

夫婦で集めている御朱印帳。出雲大社など有名どころも。この日は職場近くの熊野神社と三笠神社の御朱印をゲット。



ひとりひとりの
「ゴール」を
探し続ける

よく笑い、よく通る声でよくしゃべる。
“いるだけで場が明るくなる人”とはきっと
こういう人だ。斎藤寛子さんは、母と娘と
の3人暮らし。仕事を終えての“家飲み”が
何よりの楽しみだと言う。2年前に飲食店
の接客業から転職し、通い・訪問・宿泊
の支援サービスを提供する小規模多機
能居宅介護施設で介護士として働いて
いる。

「介護に興味があってとか、そういう感
じじゃなかったんです。介護施設で働く母
から『今日こんな利用者さんがいてね』と
か話をいろいろ聞いているうちに…私が
生まれたときには祖父母は他界してたか
ら、そういえばお年寄りと接する機会って
あんまりなかったなあ、やってみたいなっ

て、そんな気持ちだけで。でもね、今は介護士
になって本当によかったと思う」。利用者
との日々の触れ合いに、たくさんの気づき
や喜びを見出しているそうだ。

「戦争を体験した方から直接話を聞け
るのもすごいこと。ある方がふともらした
『毎日ご飯が食べられて、お風呂に入れ
て、幸せやね、当たり前のことが』という言
葉が忘れられない」。あるときは認知症の
利用者と接する中、ふとした場面で「この
方はまだこんなことができるんだ」と感動
したことも。そうした瞬間に立ち会うたび
に、自分が少しでも助けになれたらと強く

自分自身ができること それを精一杯

思う。「もちろんつらいこと、きついこともあ
りますよ。でも、この仕事に就いてから『よ
かった』『楽しい』と思えることが増えてまし
た。ささやかなことにも感動したり、心が
温かくなったり。なんていうか…心が豊か
になった気がする」。

エピソードを次々と語る斎藤さん。「そう
そう、聞いてください！こんなこともあった
んですよ！」この喜びを伝えずにはいられ
ない、といわんばかりの笑顔で。

ある女性が転倒した親をうまく助け起
こせずにいる場面に居合わせ、代わりに
介助したこともある。母親が膝を悪くして
入院したときも、介護士の技術がとても役
に立ったそうだ。「私の介助でスッと立っ
てもらえたときに、この仕事をしていて本



小規模多機能居宅介護

斎藤 寛子 (30歳)

社会福祉法人あらぐさ会 小規模多機能ホームたかとの家所属
介護士
大牟田市出身。高校卒業後、飲食店などサービス業に従事。
2020年現在の職場に就職。

当によかったと思ったんです。介護士を
やっていなかったら、あんなことはできな
かった。介護って、誰でも一度は経験して
おいたほうがいいと思うんですよね。高齢

化が進む今の時代、
身近な人がいつ介
護が必要になるか分
からないでしょ。誰で
も当事者になる可能性がありますから」。

斎藤さんは今、国家資格である介護福
祉士の資格取得を目指している。斎藤さ
んの場合あと1年実務を経験し、450時

間の実務者研修を終えれば、国家試験を
受験することができる。

「資格を取らなくても介護士として働く
ことはできますが、専門知識をしっかり学
んでおきたい。いざというときに利用者の
前でうろたえる姿を見せたくないんです。
そんな介護士が担当になったら「大丈夫
か」って思うでしょ。小さなことでも相手
を不安にさせたくない。安心して頼って
もらえる介護士になりたいから」。今の気持
ちを忘れず、いつの日か施設長に。そんな夢
もあると語ってくれた。

「実際、自分のイメージと現場は全く違いました。初めて“認知症”と向き合ったときは、すごく戸惑いましたよ。それでも先輩の仕事をよく見て真似しながら、自分なりのやり方を模索して…。先輩方のおかげで続けられたし、成長することができたと思います」。

ケアマネジャーとなって6年目。今の職場は小規模多機能型居宅介護施設だ。利用者は施設へ通い・宿泊するほか、希望に応じてスタッフが訪問介護も行う。重さんは管理職でもあるが、率先して介護の現場に出ている。「言葉で説明するより自分が動くことで、スタッフに伝わるものがあると思います。その結果少しずつ、同じ方向を向いてくれる人が増えてくると、利用者の方への対応も全体がより良い方へと変わってくるんです」。

大牟田で介護職に従事する人々は「熱量がすごい」と重さんは言う。「最近、認知症コーディネーターの資格を取りました。その研修を通して、相談できるたくさんの仲間ができたんです。高齢者をどう支援していくか、その方の思いをどう実現していくのか…悩んだ時に、1人で考えなくてもいい。こんなに心強いことはありません」。

こんなことがあったと話してくれた。とある認知症の高齢者。訪問介護サービスを提供しようにも、本人は施設に行かされると思い込み、利用を拒否していた。本人の理解が難しい場合は、家族の承諾のもとサービスを開始することはできる。しかしできることなら、本人納得の上で利用してもらいたかった。「周りからたくさんのアドバイスや励ましをもらいながら、何度も丁寧に説明を続けました。やっと家にいていいのだと理解したとき、ぱっと明るくなった。ご本人のお顔が忘れられません。本当にうれしかったです。これも仲間の助けがなければ、できなかったと思います」。諦めてしまいそうになる希望を、仲間がいれば手放さずにいられるんです—そう言って、彼はにっこりと笑った。

「妻と知り合ったころは飲食店で働いていました。あるとき先方の親から『今の仕事は土日休めないから、結婚して子育てとなったら大変よ。転職する気はない？ 介護職はどう？』と言われたのがきっかけ」と言う重 隆志さん。「資格を持っていないと言ったら、資格は現場で働きながら取ればいいんだと教えてもらって。何か資格が取れるのはいいな、と興味を持ちました」。高校を卒業以来、それまで10回ほどさまざまな職種に転職を繰り返していた。「上司や周りとか合わなかったり、報酬に納得いかなかったり、理由はいろいろ。こっちの方がいいかも、と転々としていました。でも人から新しい職を勧められたのは初めてで、それが新鮮でもあり、素直にやってみようかなと思えたんです」。高校時代に大病を患い、入院時に相談相手になってくれた男性の看護師や、優しかった祖母の記憶も気持ちを後押しした。しかし看護師である姉は「あなたにできるわけない」と大反対。その言葉に反発するように、介護の世界へ足を踏み入れた。

共に前へ進む

仲間がいるから

希望は消えない

居宅介護支援

重 隆志 (39歳)

医療法人完光会 今野病院 小規模多機能型居宅介護 ひらばるの家所属
ケアマネジャー
大牟田市出身。定時制高校を卒業後、鉄工所や飲食店、市役所の臨時職員など
10種類ほどの職種を転々とした後、2009年介護の業界へ転職。

福祉用具貸与事業所で働く古賀正悟さんは大の野球好き。プロ野球の試合は必ずチェックし、「スポーツはライブで見てこそ」と熱く語る。自身も小学生のときから野球を始め、中学・高校では部活に熱中した。その頃の仲間とは今も交流があり、夜中に集まって海外のスポーツ中継を楽しむこともある。

その仲間の一人でもある20年来の親友が、数年前に地元で福祉施設を立ち上げた。それが、古賀さんの人生に少なからず影響を与えることになる。「友人の話を聞いているうちに、福祉業界に興味を持ちました。福祉事業の需要は高まる一方で、人手は足りていない。高齢化が加速する社会の状況を見ても、“潰れることはない職種”だな、と」。

古賀さんはその頃、家電量販店で販売員として働いていた。高校を卒業し就職して約10年。自身の仕事に“行きづまり”を

感じていた。「時代の流れに押されている感がありました。店舗販売は価格面ではどうしてもネット販売に勝てません。徐々に全体の売り上げは落ちていました」。ネットの価格を引き合いに出し、値引しろと言う客も少なくない。業界の先細りを感じ、精神的にも疲弊していた中だった。「今がシフトチェンジするタイミングなんじゃないか、と感じたんです」。

転職先は、歩行器や手すりなど、自宅で暮らす要介護者・要支援者の日常生活をサポートする用具を扱う福祉用具貸与事業所。当初は用具の配達を担当していた。「長く続いたらいいな、くらいの軽い気持ち」で始めた仕事だったが、2年前に福祉用具専門相談員の資格を取得し、今は配達員から営業職へと“第2のシフトチェンジ”の最中だ。

「一人暮らしの高齢者宅へ伺って、その大変さを目の当たりにしたのは大きかった。

もう本当に、座ることも、立ち上がることもここまで苦勞されているのかと。でもそこに福祉用具のちょっとした器具があるだけで、『かなり楽になりました、なんとかもう少しは一人でやっていけます』と、とても喜ばれるんです。その声を聞いたときに、これは必要な仕事だと改めて思いました。用具を手にしたご利用者の反応を見ると、貢献できた、よかったという実感もわいてくる。商品を渡したらそれで終わりじゃなくて、信頼してもらえたらそこからお付き合いが始まるのも、やりがいになります」。福祉用具だけでなく、使用に伴う住宅の改修工事などの幅広い知識も必要になる。「利用者にぴったり合う用具を選定し提案する、その責任はかなりありますね。万が一、使ってみて合わなかったときの次の手、その次の手も考えておかなきゃならない。それは先輩方の対応を見ていて感じます」。

職場には定年退職間近の先輩たちもいる。次の担い手として掛けられる期待は大きい。「まずは一人で営業をこなせるようになること。それから自分でお客さまを獲得できるようになることがとりあえず目標」と、目線は着実に前を見る。「ずっとこの業界でやっていきたい」。その笑顔に、迷いはなかった。

シフトチェンジ しながら 走り続ける

RUN WITH
THE HEART

株式会社西日本医療センター所属
福祉用具専門相談員
大牟田市出身。高校卒業後、家電量販店に就職、販売員として勤務する。2017年に現在の職場に転職、2020年に福祉用具専門相談員の資格を取得。

福祉用具貸与

古賀 正悟 (33歳)

愛犬や家族に 支えられて向き合う “濃い看護”の魅力

FACE

主治医の指示のもと、看護師が利用者宅へ訪問し看護する訪問看護ステーション。ここで働く後藤かずさんは、親の勧めもあって看護学科のある高校に入学し、看護師の資格を取得。卒業後、現在の病院に就職した。

“看護師”は、ほとんどの人が“大変な仕事”というイメージを持つ。いわゆる「3K」の代表として取り沙汰されることも多い。「大変なのは、本当にそうですけど。すごくやりがいや楽しさがある仕事です」と後藤さん。「患者さんと接することが好きで、もうそれが一番の楽しみ」。その気持ちは、病棟から訪問看護に移ってより一層強くなったそう。「訪問看護は、何というか…病棟にいたときよりも“濃い看護”ができるんですよ。時間いっぱいをその方だけの看護に使えますから、お話しもたくさん聞けますし、一人一人とより深く関わりを持つことができます。利用者の家族と触れ合うことも、病棟ではそんなにないです。今の方が“看護をしているな”とより強く感じます」。相手と真摯に向き合い、話に耳を傾ける。その姿勢や思いが伝わり、後藤さんに信頼を寄せる利用者は多い。「“あんたが来てくれたんだ！よかった”っていう一言で、私は十分」。

訪問看護は、通院をしている人も必要に応じて利用することができる。「薬の管理が難しい方や、体調を毎週見てほしいという方もいらっしゃいますよ。何かあったときは電話をいただければご自宅に伺う24時間体制なので、家族の方々の安心にもつながっているようです」。日々の健康

状態の観察はもちろん、時には、自宅で最期を望む人を看取することもある。「こればかりは、何度立ち会っても慣れないですね。悲しいけれど、ご本人やご家族を見ていると“お家でよかったね”という思いがします」。

訪問看護ステーションへ異動を希望したのは8年前。子育てで病棟での夜勤が難しくなったためだった。今は夜勤がないとはいえ、忙しさに変わりはない。月に数回は24時間体制で緊急の呼び出しに対応する「待機日」の当番もある。2人の子どもはまだ手がかかる年頃。「いつも仕事が終わらなくて、てんてこまい(笑)」。そんなときは家族の協力ありがたい。「夫が早めに帰って来て塾へ子どもを送ってくれたり、近くに住む両親が買い物や料理を代わりにしてくれたり。本当に助かっています」。

あわただしい日々の合間、休日の食事やショッピングが後藤さんの楽しみ。ネットで気になる情報があれば、母と一緒に車で出掛けてストレスを解消している。もう一つ、何よりも癒やしをくれる大切な存在が、愛犬の「ココ」。取材の日もココが“お供”していた。「帰宅すると一番に喜んでくれる(笑)。疲れが飛んでいっちゃいます」と、愛おしそうに抱きかかえる。

看護師一筋で歩んできた後藤さん。他の道を考えたことはないのだろうか。「そうですね…少しはありますが…やっぱりこの仕事が好き。今が楽しいです」。笑顔が輝いていた。

社会医療法人親仁会
大牟田訪問ステーション所属
看護師
熊本県長洲町出身。高校の看護科を卒業後、看護師として大牟田市の米の山病院に勤務。2011年から大牟田訪問ステーションで訪問看護に従事している。

訪問看護 後藤 かずさん（39歳）



通所リハビリテーション

平岡 奏恵（20歳）

医療法人睦月会 堀整形外科麻酔科クリニック 通所リハビリテーション所属
介護士
大牟田市出身。2022年に現在の職場に就職。介護の現場で働きながら、
介護福祉士の資格取得を目指す。

歩き始めた

おばあちゃん子の

透き通った思い

の中で、確実に成長している平岡さん。「利用者がどんな経緯でここにいらしているのかを知りたい。どういう生き方をしているのか。それを知った上で、相手とお話ができたらいいなと思います。そのために、将来はケアマネジャーを目指したい」。人を知り、人に寄り添う介護者へ。その歩みが、今始まった。

通所リハビリテーションで介護士として働く平岡奏恵さんは、就職して8カ月余りの超新人だ。「今の仕事が好き」と笑顔を見せる。きっかけは母のアドバイスだった。「年が近い人たちと話すのが苦手。おばあちゃん子だったからか、高齢の方とは素の自分で話せるんです。だから、母が介護職が向いてるんじゃない?って」。

介護職や施設についての知識はほとんどなかった。通所リハビリテーションについても、そういう施設があることを求人票を見て初めて知った。「通いでリハビリできてマッサージもしてくれて、気持ちよくなって帰れるって、すごくいいなって思ったんです。実際にリハビリした後に動きがスムーズになったという方を見て、デイケア、すごいなって(笑)。おばあちゃんが生きていたら、通ってほしかったな」。

介護士になって平岡さんが今夢中になっているのは、新しいレクリエーションを考えること。「全員を楽しませたいんです。でもなかなか難しい。それがかなったときは、すごく達成感があります」。SNSに投稿されたレクリエーションの動画を探して試行錯誤。利用者との会話からゲームを考えつくこともある。「仕事で海苔の養殖をしていたという方が多かったの、そういう方は手先が器用なんじゃないかと、手を使うゲームを考えました。細く切った新聞紙を、綱引きみたいに2人で引っ張り合う。すごく盛り上がったんですよ」。

スタッフの中では最年少。全くの未経験だったため、最初は先輩スタッフについて仕事の流れを学んだ。入浴や排せつの介助も、平岡さんは最初から戸惑うことなくできたという。「もともと抵抗なくできると思っていたのも、介護職を志望した理由の一つです。相手をきれいにしてあげるのが好き。髪を整えてあげたり、オムツを清潔なものに替えてあげると、自分がすっきりした気持ちになるから好きなんです」。

業務を1人でひととおりこなせるようになった今、平岡さんはある“葛藤”を感じるようになった。「お風呂だって、ご本人にとっては本当は自宅でゆっくり入れるほうがいい。それにはできるだけ自分で動く練習をしてほしいけど、浴場に長居するのは体によくない。どうしても手を貸して、さあもう上がりましょう、となってしまふ」。自立支援と利用者の安全の確保、その兼ね合いは介護者が常に抱えるジレンマだ。「最初はただ楽しく過ごして帰っていただければいいと思っていましたが、今は少しでも元気になっていただくために、私が何ができるかを考えないと」。利用者との交流

HEART

有料老人ホーム

立山 一明 (33歳)

株式会社ゆうわ 介護付き有料老人ホーム出雲ハイツ所属

介護福祉士

大牟田市出身。2009年に介護士として現在の職場に就職。2013年に介護福祉士の資格を取得。

ORDINARY DAYS

介護福祉士の立山一明さんの趣味は釣り。ヒットして釣り上げるまで“糸が切れるか切れないか”の、ギリギリの感覚が醍醐味という。釣り場に着くまでの仲間との道中も、釣った魚を食べるのも楽しみ。「前日はめちゃくちゃうれしくて眠れない」というほどだ。

本格的に始めたのは、祖父から釣り道具を譲り受けたのがきっかけだった。「釣りやキャンプとか、アウトドアが好きなじいちゃん。それがあるとき、自分の釣り道具を全部くれたんです。年を取って、もうできなくなったからって」。両親と祖父母の“3世代同居”の中で育った立山さん。祖父母が年を重ね、デイサービスに通う姿も日常の中で見ていた。「この仕事についてのは、じいちゃんとかあちゃんがだんだん弱っていくのを見ていたのが大きかったかもしれない。でも当初は介護ってどういうものなのか、全く知らなかった」。

立山さんの職場は介護付き有料老人ホーム。介護スタッフが常駐し、入居者は身の回りの世話や食事、入浴、排せつなどの介助を受けられる施設だ。基本的に支援や介護を必要とする人が対象で、認知症の症状がある人もいる。

認知症が進行している人の介護は難しい局面も多い。良かれと思ってしたことが全部否定されたり、何をしても強く非難されたり。その日は受け入れられても、次の日は拒否されることもある。「毎朝その日の業務の計画を立てますが、まあ、その通りにいかないです。状況が一日で全く変わっていることもあるし」。

予測不能な相手の言動や、思い通りにいかない状況。「それが一番きつかった」と立山さん。しかし働くうちに、それを当たり前のことと“受け止め”、心の中で折り合いをつけていった。「受け止めないと、自分がきついと思うんですよ。認知症のあるなしに限らず、人は思いどおりに動かないものでしょう。相手は“外に行く”と言ったら、止めようとしても止まってくれない。だから“今日は寒いよ”とかいいながら、僕は一緒について行くんです」。

きついつきに心を浮上させてくれるのが、休日の釣り。自然と向き合い、仲間と語らって気持ちを切り替える。

「慣れたかっていわれると…最初に比べれば。逆にちょっとしたことで、すごく喜ばれることもあるんですよ。働くにつれてだんだんと、この仕事、何かやりがいがある

るなと思うようになりました」。今は後輩のがんばりが自身の励みになっている。「新しく入った人を見ていると、いつのまにか自分の中に“慣れ”や“当たり前”ができていくことにハッと気づくことがある。“新人の感覚”は大切にしたいですね。だから、その人のやり方をできるだけ否定しないようにしています」。

施設の代表からは近々管理者にと期待されている立山さん。どんな介護を目指すのだろう。「ここに住む人が普通の、当たり前の生活を送れること。それでいいんじゃないかな。僕たちはその時その時を、受け入れながら」。

あるがままに受け止めて

ままならない日常も

訪問介護・ヘルパー

坂井典世（49歳）

有限会社ゆとり訪問介護ゆとり所属
介護士

2015年に母親の後を継ぎ市内で飲食店を経営。2017年、現在の職場に転職。
実務者研修、サービス提供者責任者などの資格を取得し、今年介護福祉士の資格取得に臨む。



このままじゃいけない
危機感を持つ

元飲み屋のママ

坂井さんは元飲み屋のママだ。店を経営していた母親が8年前に急逝し、その後を継いだ。「やめないでというお客さんがたくさんいたので、私が引き継いだんです。でもお酒も飲めないし、安い料金設定だったから、もうきつくなって思っていました。焼酎のキープが900円だったんですよ(笑)。チャージ料入れても1,000円くらい」。1年半程が過ぎた頃、訪問介護施設を経営する叔父から電話があった。「人が足りない。手伝ってくれないか」と。

「店を継ぐ前はリラクゼーションマッサー

ジの仕事をしてたんです。人と話したり、癒やすような仕事が好きで」。これまでの経験は訪問介護の現場で生きた。利用者とすぐ打ち解け、気に入ってもらえる。「おじいちゃんから結婚を迫られたことも(笑)。50ぐらいならちょうどよかって言うんですよ。いや、ちょうどよくないよ(笑)。」几帳面な性格も仕事に合っていた。「細かいところが気になって、隅々まで掃除するから喜ばれて。あんたじゃないと言って言われることもありました」

その一方で、訪問介護の現状には不満



も抱える。一つは制度上の課題だ。「利用者のお宅でできることは“生活に必要な最低限のこと”だけ。窓を拭いてはいけない、玄関の外を掃いてはいけないとか、制約があるんです。掃除してあげられるのは生活で使うところだけ。居室とトイレ、お風呂、台所くらいです。ここホコリが溜まっているなと思って、そこは“生きていくのに困らない”とこだからやらない、できない。自分が利用者だったら、それは嫌ですよ。拭いてくださいと思う」。

もう一つは待遇の問題。「仕事自体は嫌いじゃないんです。でもそれに対して給料が少ない。休みも。これなら他のパート

の仕事の方が楽なんじゃないかと思います。反対に聞きたいくらいです。介護の仕事の魅力って何？」

仕事のストレスは大きいですが、はげ口はしっかりと作る。「aikoが好きなんです。aikoになりたい願望が強い(笑)。aikoが髪を切ったら私も切ります。テンション上げるためにライブTシャツを着て仕事すること。もちろんファンクラブにも入ってます。今年はライブがあるから楽しみ！そうそう、DRUM TAOも好きなんです。この間も公演に行ってきました」。スケジュール帳を楽しみな予定で埋めることが仕事の活力になっている。

現状を憂いながら、坂井さんはやりがいを作り出すことを考える。「例えばヘルパー限定のクーポンや割引。そのクーポンで商品が安く買えますとか、映画がタダになりますとか。それだけでも、違うんじゃないかって。ヘルパーになりたい若い子たちを後押しできることをいろいろ考えて、実現できたらいいですよね」

介護を必要とする人は、これからも増え続ける。しかしそのフィールドは、いまだにたくさんの大きな“穴”が開いたままだ。介護に携わる人々が安心して働くには、たくさんの人が協力してその穴を埋めなくては。フィールドの枠を越えて。



プライベートのカレンダーはネイルや美容室の予約でいっぱい。大切にしているという余暇の趣味を指さす爪はキラキラと。

旅が好きだという古戎伸次さん。「現地の人と話したり、一緒に飲んだりが楽しいですね。旅先では自分の考え方や感じ方が、普段と全く変わることがある。それも面白くて」。そんな好奇心や積極性が、自身を今の仕事に導いた。「お酒飲みに行くのが好きで。今勤めている会社の社長とは、酒の席で知り合いました。何度か飲み屋で一緒になって話をしてる内に、ちょっと手伝いに来てくれんかと言われて。時間あるならちょっと来てくれ、と」。そして今、リハビリ特化型のデイサービス施設に施設長・理学療法士として勤務している。

誘いに応じて始めた仕事は、順調な出

だしとはいかなかった。「入って2日目ぐらいで、利用者にめちゃくちゃ怒られました。大声が施設中に響いて、もう大変でした(笑)。とてもこだわりがある方で、僕がそれをあまり理解しないまま対応してしまった。その人の中では一つ一つに流れがあるにも関わらず、説明をせずにやってしまった。大丈夫だろう、できるだろうぐらいの気持ちだったと思うんです。それが相手の怒りを買ってしまった。上司からは一度引きなさいと言われたんですが、僕はもう一度、ちゃんと話をしたかった。そう伝えたら上司も背中を押してくれて。そこから徐々に関係が変わっていったかな。今は

冗談が言い合えるぐらいの間柄です」。

失敗しても、嫌なことがあっても、古戎さんの思考は常にポジティブだ。「周りに仲間がいるからですね。実をいうと、俺がなんかやらなくても周りがカバーしてくれるだろう、ぐらいの勢いで踏み出してることもあったりして。仕事仲間には自分にとってすごく大事な存在で、それもプライベートと仕事では、同じ人でも関係性が少し変わる。その違いがあることが自分の中ですごくいいことなんじゃないかと思ってるんです。プライベートではみんなめっちゃくちゃ優しいですよ。でも仕事の時はやっぱりちょっと(笑)。ミスして怒られて、その時は

ギクシャクするんですけど、いいタイミングで話しかけてくれたり、仕事が終わったら時間作ってくれたり。いろいろ頼ることもあるし、本当に助かっています。周りから守られていると感じられるから、思い切ってやれてることがたくさんある」。

施設長になって約1年。その間、自身の中にはどんな変化があったのだろうか。「この1年は本当に覚えることがいっぱいあったな。もちろん、まだできていないこともあるから、そこはしっかりやっていかないと。それから、自分の意見を現場に落とし込めないことが多々あることを実感した1年でもありました。まだまだ、これからだと思います。みんなでやりたいことを、ここならみんなできっとできるってものを見つけていけたらいいなと。それが利用者だけでなく、スタッフもやりたいことであつたらいいと思う」。

彼の周りには、話を親身に聞いてくれる仲間がいる。ポジティブな思考に共感してくれる人がある。思いはきっと近い内に、かたちになっていくだろう。

通所介護

古戎 伸次 (30歳)

株式会社リードリハビリ特化型デイサービス ミライ 施設長

理学療法士

長崎県出身。大学卒業後、株式会社リードに理学療法士として就職。

2021年に施設長として現在の職場に配属。

仲間がいるから行ける

飛び込む

知らない場所へ

CHALLENGE

だから強くなれる

支えてくれる人たちがいる

RELIABLE

仙崎 美咲 (36歳)

短期入所生活介護

社会福祉法人それいゆ短期入所生活介護 アルファンスメロウ所属
介護福祉士
1986年生まれ。福祉系専門学校を卒業後、現在所属する法人に就職。
特別養護老人ホーム、ケアハウス勤務を経て現在の職場でショートステイ相談員として勤務している。

「去年、ダイエットしたんですよ」と仙崎美咲さん。健康診断で“警告”されて一念発起、10キロの減量に成功したそうだ。「二度の妊娠、出産でちょっとずつ体重が増えちゃって。人生初のダイエット、がんばりました」とにっこり。一度決めたらやり抜く辛抱強さ、意思の強さは、仕事にも表れているようだ。

高校の頃は「たいして夢もなかった」という。周りの友達が次々と進路を決め、気ばかりが焦った。「動物が好きだったからペット業界とか…、音楽業界にも興味がありました。でも仕事としてやっていくのは厳しいかなと。保育園も考えましたが、当

時は子どもが苦手で(笑)。「消去法」で最後に残った道が介護職だった。心の片隅にあったのは、曾祖母を介護していた祖母の存在。「何もしてあげられなかった」という思いが、背中を押した。

就職先は複数の福祉施設を運営する社会福祉法人。仙崎さんは、主に要介護3～5の高齢者が入居する特別養護老人ホームに所属した。「どうせやるなら最初から特養に行きたいと専門学校のときから思っていました。一番大変なところを経験しておけば、後はどこに行っても大丈夫じゃないですか」。

覚悟はしていたものの、実際かなり

ハードだったという。特に1人で担当する夜勤は苦手だった。「介助をしている最中に他の部屋からナースコールがあったり、体調が急変する方がいたり、突然叫び声が聞こえてくることも。全部1人で対応しなくちゃいけない。何回辞めようと思ったことか」。それでも続けられたのは、共に働く仲間がいたから。「職場の環境がすごくいいんです。みんな仲が良くて、何でも話せる場があったから救われました。苦労を分かち合って、励まし合っていましたね」。仙崎さんは、ケアハウスに異動となるまで約5年を勤め上げた。

現在は同法人の「短期入所生活介護」に所属し、ショートステイ利用者とその家族をサポートする相談員の役割を担っている。ショートステイは介護保険があれば誰でも利用できるため、要支援1から要介護5まで、さまざまな状況の高齢者が宿泊する。「今までの経験があったから、うまく

対応できているなと思います。特養での経験から要介護者やその家族への理解が深まりましたし、ケアハウスで培ったコミュニケーション力が役に立つときもあります。それぞれの職場で必要とされた技術をここで生かしているから、ここで働くのが今でよかったと思います。」

プライベートではケアハウス勤務時に結婚、出産。育休後に復帰した当時、子育ては両親がしっかりサポートしてくれた。「毎日幼稚園に迎えに行ってくれました。仕事が終わって実家に行けば、子どもたちは夕食を済ませて待っている。両親がいなかったら仕事を続けられなかったと思います。今も子どもと接する時間は限られてしまっていますが、そこは分かってくれているみたい。“お仕事しないとお金ないもんね”って(笑)」。家族や仲間と支え合い、奮闘の日々は続く。

撮影が趣味だという西村理絵さん。カメラは子どもの成長を記録するために始めた。職場でも撮影係として行事や職員、入居者たちの写真を撮っている。「行事の様子を撮ったものを見せて喜んでもらえるのがうれしい」と西村さん。「いきなりカメラを向けて笑顔で、と言っても難しい。やっぱり日頃のお付き合いや、他の職員の協力もあってですね。手にしたタブレットは、彼女が撮影した写真を編集するためのものだ。

西村さんは看護専攻科のある高校へ進学した。親や親戚が看護師で身近だったことが理由だった。しかし看護師の資格取得を前に、道半ばでつまづいてしまう。「専攻科は高校の3年間からプラス2年あって、1年半まで通ったんですが、そこで辞めてしまっ

それでも、高校の実習で行った介護施設での経験がきっかけで、改めて介護の仕事に就くことを決意。アルバイトをしながら22歳で介護職員初任者研修の資格を取得した。「車の免許もないし経験もない。それでもちょっとここで働いてみないか、と言われて、本当にその資格だけ持った状態で仕事を始めました」。

最初は掃除や食事の介助が主な仕事だった。しかし働きながら介護福祉士の資格を、さらに3年後には准看護師の資格を取得。今狙いを定めているのはケアマネジャーだ。日々の仕事と子育て、その中での猛勉強一。

「目の前で起こっている状況に対応することができずに、先輩や看護職員を呼んだり、見てることしかできなかったりしたことが、もどかしく悔しかった。資格取得や研修で学んで、自分もできるようになりたいという思いがありました。その一方で責任も大きくなってくるので、プレッシャーも少しあります」と語る西村さん。しかし話を伺うにつれ、彼女の心の内にある他の理由も見えてきた。

「一つはその、高校の時に一度資格を諦めたというのがあって。知識はあるけれど、仕事ではできないという。だからもう一度挑戦してみよう」と。同じ介護の世界に身を置く夫の存在もある。「夫も同じ介護職。彼に負けたくないという思いもありました」。モチベーションの正体はこれらにとどまらない。

「自分がキャリアアップしていきたいというよりは、一緒に働く人たちを理解したいというのがあります。ケアマネさんとか、ものすごくいろんなことを知ってますし。やっぱりそれなりの知識がないと、対等に話すのも難しい。きちんとコミュニケーションを図るためにも、専門的な知識や資格があった方がいいなって感じなんです。どちらかというとコミュニケーションを取るのが苦手なので、その人を理解するためにはその人の一部をまず理解しようって」。

人を知りたい
そのための力を
身につけたい



西村さんはかつての挫折を跳ね除け「関わる人を積極的に理解していきたい」その一心で仕事を続ける。

「ここではゆっくりじっくりその人と向き合うことができます。そこに魅力を感じて今の仕事を続けています」。

有料老人ホーム
西村理絵
(30歳)

社会福祉法人博愛福祉会 ケアハウス ユーユー所属
介護福祉士 准看護師
高校の看護専攻科を中退後、2014年に現在の職場に就職。
仕事をしながら介護福祉士、准看護師の資格を取得。二児の
母で、職場ではカメラマンの役割も。

ごあいさつ Greeting

最後までお読みいただき、ありがとうございました。どんな感想をお持ちになったでしょうか。12人12通りの人生がそこにはあるのだと、きっとそう感じていただけたのではないかと思います。

今回登場していただいた12人は、日々「ふつう」に現場で働いている方々です。楽しく一生懸命に、そして時に悩んだり迷ったりしながら働く「あなた」と何ら変わらない隣人です。また、介護の世界には様々な働き方があることもお分かりいただけたのではないかと思います。

大牟田市介護サービス事業者協議会では、これまで「介護」についての理解を深めるために、様々な取り組みを行ってきました。もしこれを読んで「この人の考

え方好きだなぁ」とか「私も同じように悩んでるんだよなぁ」と共感いただけたとしたら、それはもしかするとあなたのすぐ隣にある「介護」と関わるチャンスかもしれません。今回紹介した彼らのように、共に働きながら成長していける、かけがえのない仲間もたくさんいます。

最後になりますが、この介護の世界により多くの方々が興味関心を持ち、一緒にこの大牟田の暮らしを豊かにしていくための仲間が増えることを願い、謝辞に代えさせていただきます。

大牟田市介護サービス事業者協議会

会長 井田 謙



編集後記

地域福祉の重要性が高まる一方で、介護業界の人手不足が叫ばれる昨今。なんとかして、より多くの人に介護の仕事の魅力を伝えていきたいとの思いから始まったプロジェクト。介護に携わるさまざまな業態から、その現場で働く12人を取材しました。12人との語らいは、それぞれの思いや信念に従い日々奮闘するご本人の姿だけでなく、職場の方々、利用する方々の笑顔までが浮かんでくるよう。取材する私たちにとっても、たくさんの新たな発見や気づきがありました。

今回のプロジェクトをきっかけとして、今後もイベントやインターネットなどを活用し、さらなる魅力の発信に努めたいと考えています。最後になりますが、お忙しい中、またコロナ禍の大変な状況の中で、ご協力いただいた会員の法人様、取材に応じていただいた方々、そしてデザイナー、ライターを含むプロジェクト実行員会の方々に心から感謝いたします。皆さまの協力なしにはこのプロジェクトは実現しませんでした。本当にありがとうございました。

最後にもう一言…介護で働く人たちって、やっぱりカッコいい！

実行委員長 松井 直澄



【ケアニン発掘プロジェクト】 松井 直澄／谷口 盛宏／斎田 豪堅／野中 桜／待鳥 留奈（組織広報部会 部会長 菅原 知之）

大牟田市介護サービス事業者協議会

｜ 加盟事業所 ｜

株式会社あすか介護サービス／社会福祉法人甘木山学園／医療法人幸知会／有限会社有明ケアサポート／一般社団法人大牟田医師会／公益財団法人大牟田医療協会／社会福祉法人大牟田市社会福祉協議会／医療法人福岡輝生会／医療法人けんこう兼行病院／医療法人完光会今野病院／社会福祉法人キリスト者奉仕会／株式会社銀水会／医療法人恵愛会／社会福祉法人けんこう／社会福祉法人原交会福祉会／社会医療法人弘恵会／社会福祉法人恩賜財団済生会支部福岡県済生会／重藤内科・外科／医療法人寿心会木村内科医院／医療法人橋仁心会たちばなクリニック／有限会社心介／社会医療法人親仁会／医療法人信和会／医療法人静光園／医療法人くさかべ病院／社会福祉法人それいゆ／社会福祉法人天光会／医療法人東翔会／社会福祉法人東翔会／医療法人富松記念会／株式会社西日本医療センター／株式会社ニチイ学館／社会福祉法人博愛福祉会／社会福祉法人福因寺福祉会／医療法人福寿会／医療法人睦月会堀整形外科麻酔科クリニック／社会福祉法人木犀会／有限会社モルゲン・ハチジウハチ／やまなみ介護生活株式会社／医療法人悠久会／株式会社ゆうわ／有限会社ゆとり／有限会社ブルーム／社会福祉法人グッドタイムズ／有限会社サンステップ／株式会社あうる／医療法人静光園第二病院／有限会社ふれあい／株式会社福祉サービスサカタ／有限会社宅老所ことの葉／麻生介護サービス株式会社／社会保険大牟田天領病院／社会福祉法人大牟田市福祉事業協会／医療法人吉田クリニック／医療法人兼行医院／有限会社北村／医療法人CLSすがはら／医療法人藤杏会／株式会社シャイニングライフ／社会福祉法人あらぐさ会／株式会社リード／株式会社おもてなし／株式会社Saita／一般社団法人IKEDAYA／伊藤商事有限会社／合同会社Leaf stone